

2013. 4. 15 / Vol. 41

# 1880年代教育史研究会 ニュースレター

第 41 号

## 目 次

### [連載]

- 神辺 靖光 「学校をめぐる逸話と風景(15)  
江戸藩邸学校」…………… 2
- 神辺 靖光 「本校分校支校、学校配置網覚書(5)  
余話・仏教宗派学校との比較で」…………… 3

### [個人研究]

- 谷本 宗生 「健康法・冷水養生法の提唱」…………… 5
- 田中 智子 「京都府下大村達斎の医学校の名称について」…………… 6

### [例会]

- 谷本 宗生 「例会の概要(2013年2月20日)」…………… 7

- [お知らせ]…………… 12

## [連載] 学校をめぐる逸話と風景 (15)

## 江戸藩邸学校

神 辺 靖 光

これまで東京に集められた大名華族が、旧藩邸江戸屋敷に学校をつくったことを述べてきた。大名が主体的に学校をつくったのは前回述べた7例であるが、旧藩邸を私学に貸した例はもっと多いのである。どうして東京の大名屋敷には私学が入り込むのだろう。藩邸の敷地は広く、幾棟の屋敷がガラ空きになったのだから、そこに私学が入り易かったとも言えよう。しかし学校以外の施設が入ってもよかったのである。現に官庁や政府高官の屋敷になったものも多い。

実は江戸の藩邸にはかなり以前から学校ができていたのである。これを江戸藩邸学校とっておこう。数ある藩学史の中で、領地の藩学校を述べた上で、江戸の藩邸にも学校をつくったとするものはあった。しかし江戸藩邸学校をトータルに論じたものはなかった。これを明らかにしたのは名倉英三郎氏である（「江戸府内諸藩邸内学校の概況」藩学史研究第4集 1986年）。名倉氏によると江戸藩邸学校は87カ所あった。つまり明治維新を迎えた頃、旧藩邸に学校があるのは普通のことになっていたのである。

江戸の藩邸について述べておこう。徳川氏が自分の家臣や外様大名に屋敷地を与えて江戸城のまわりに住ませたのは天正から慶長年間（16世紀末）であるが、明暦大火（1657年）以後、これを制度化した。即ち大名当主とその家族が住む上屋敷を江戸城の正面に配置し（現皇居前広場、国会議事堂周辺、霞ヶ関官庁街、丸ノ内日比谷のオフィス街）、隠居大名や嗣子が住む中屋敷を外

濠に沿って並べ、休息用別荘としての下屋敷をさらにその周辺に置いた。下屋敷は別荘だから数寄をこらした。現在に遺る六義園、新宿御苑、有栖川公園は大名下屋敷の名残である。

参勤交代で国許から主君に従って江戸にきた侍のうち、立帰りと言って、すぐに国許に帰る者もいるが、多くは江戸詰になって、翌年、主君が帰国するまで藩邸に寄宿する。別に定府と言って、江戸に定住する侍もいる。この場合は妻子ともども藩邸に寄宿するのである。藩の規模によって違いがあり、また遠隔地の大名は例外規定があるから一概には言えないが、大ざっぱに言って、大藩の場合は5～6,000人、小藩でも5～600人が藩邸に住んでいた。上屋敷、中屋敷、下屋敷（これは一カ所でなく、いくつもあった）に分散寄宿するのだが、広くなければ、これだけの人数は受け入れられない。

藩邸に大小があるが、形は大体きまっている。屋敷の四周を長屋がとり巻く。二階建もある。江戸は京都と違って、海に迫った丘陵地であるから崖や坂が多い。坂道に沿って武家屋敷が延々と続くのが江戸の風景である。

長屋屏の内側にまた長屋をつくる場合もあり、いくつかの棟割り部屋を配置する場合もある。それらのほぼ中央に主君や家族が住む御殿や、定府の重臣宅がある。表門（長屋門）の内側のさらに御殿や重臣宅の門があるのだから、仰々しいものである。江戸詰の侍は長屋の区切られた部屋（棟割り部屋）に数人ずつ寄宿するのである。

江戸詰の侍はあまりすることがない。たまに藩主が江戸城に登城するが、お供は少ない。大名行列にはならない。時間を持てあました侍たちは、折かく花のお江戸にきたのだからと街の見物に出かける。真面目に調べものをする侍もいたろうが、遊びまくる者もいたろう。それが藩主や重臣の耳に入って、江戸詰侍の訓育、教育ということになる。こうして藩邸学校がはじまったのである。

はじめは江戸に住む高名な学者を招いて御殿の広間で講釈して貰った。藩邸学校が上屋敷に多いのはそのためである。やがて、国許の藩儒を江戸に呼んで、講釈や輪講、会読の指導をした。藩邸学校の開設時期は国許の藩校解説時期と同じ頃である。藩が藩校をたてると、大概、雅名をつける。すると同時に藩邸学校にも同じ校名をつける場合がある。下総の佐倉藩は成徳書院の名を佐倉と江戸藩邸学校につけた。備後の福山藩は福山城下と江戸藩邸学校に誠之館という同じ名前をつけた。佐倉藩堀田家と福山藩阿部家は徳川譜代大名で、幕府重役・老中になった。その時、藩主は定府になり江戸詰家臣も多くなる。藩の教育命

令は江戸藩邸学校から出されるので、どちらが本校かわからなくなった。

明治の初年、藩邸はガラ空きになったと言ったが、その兆候は幕末にあった。即ち文久2(1862)年、参勤交代がゆるめられると、国許に妻子をもなって帰る大名が引きも切らず、江戸詰の武士も少なくなって、藩邸は寂しくなった。当然、藩邸学校も活気をなくしただろう。その関係もあろうか。この頃の藩士交流の故もあろうか。藩邸学校に他藩士がつめかけるようになった。

福沢諭吉は安政5(1858)年、江戸築地鉄砲洲の豊前中津藩の中屋敷(現国立がんセンター西隣地帯)に蘭学塾を開いた。藩主・奥平の命令という。これが藩邸学校か、福沢の私塾か判断に苦しむが、福沢が欧米を旅行して帰国した以後、生徒が急に増えた。特に紀州藩の江戸詰武士が多かった。そこで紀州藩では築地の中津藩邸内に紀州藩武士が住む長屋を建てた(『慶応義塾百年史・上』)。幕末も押し迫った慶応2(1866)年のことだが、そんなことができたのだ。この建物は紀州塾と呼ばれた。(続く)

## [連載] 本校分校支校、学校配置網覚書(5)

### 余話・仏教宗派学校との比較で

神 辺 靖 光

前回、キリスト教団、特に米国プロテスタント各派の宣教師達が、日本の都市各地に中学程度の学校を次々にたてたが、本校・分校・支校の名を使わなかったことを述べた。

同じ1870年代から90年代にかけて、日本各地に学校をたてたのは仏教各宗派の教団である。こ

れはどうか。

明治政府ははじめ、神道で国民思想を統一しようと明治3年1月、大教宣布の詔勅を出した。しかしその実行者である神官達は説教の実力がないため、政府は新たに教部省を置き、神官僧侶協力体制で国民教化を行うとした。そして東京の

増上寺に大教院、府県の大寺院、大神社に中教院、町村寺社に小教院を置いて、国→府県→町村という系統のもとに教化運動を興そうとした。しかし肝心の僧侶神官が協力しないので、77年、大教院を廃止した。廃仏毀釈以来、仏教の再興を狙っていた各教団は、これを機に教勢拡張のための僧侶養成組織をつくりはじめた。即ち、真言宗では本山に大学林、地方に中学林。日蓮宗では壇林、中壇林、小壇林。曹洞宗では大学林、中学林、小学林。真宗では大教校、中教校、小教校等、いずれも教部省時代の組織や名称を踏襲したのである。勿論、この組織で一直線に進展していったのではない。派内の争いがあったり、名称も変わったり紆余曲折があるが、大学林、大教校を頂点に、地方の拠点学校を統轄するという組織体系は変らなかった。それは国の大学・中学の関係を写し取ったものであり、中学林から大学林へ進学する意味も含んでいた。プロテスタントの並列的な連携でなく、立体的な監督支配の体制であった。後の私立大学と附属中学の関係に似ている。故に分校とか支校とか言わないのである。

次に宗門宗派の動きからみよう。明治初期に来日した米国プロテスタントの宗派は30派を超える(小沢三郎『日本プロテスタント史研究』)。各派争って布教に教育に熱中するが、異国での活動の不都合や、日本人信徒の都合によりいくつかの宗派が合体することが、しばしばあった。例えばメソジストは米国監督教会とカナダメソジスト教会の派遣者が合体して日本メソジスト教会をつくったし、聖公会は米国プロテスタント監督教会、英国教会伝道会、英国福音宣伝会の三つが合同して日本聖公会になったのである。明治学院の

源流である築地バンドや横浜バンドはアメリカ長老教会と米国オランダ改革派教会が交じっていたが、これを合体して一致教会とし、後に日本基督教会にしたのである(柳田友信『キリスト教史』)。このように小さな個々の教団が合体して強い勢力をつくっていったのが、この時期のプロテスタントの活動であった。それ故に、個々人のはじめた小さい塾のような学校も合体してより強力な学校になろうとする。これが合併をくりかえして成長したプロテスタント系英語学校の姿である。本校・分校などと言っている暇などなかったのである。

仏教は日本に伝来以後、<sup>あまた</sup>数多の宗門宗派があった明治維新を迎えた。僧侶養成学校はこの宗派別につくられたが、維新後もさらに宗派の分離独立があった。例えば真言宗の金剛峯寺派と護国寺派の如きである。これに連れて、その学校も古義大学林と新義大学林になる。後の高野山大学と豊山大学である。

仏教各派の学校設立は、はじめは僧侶養成が目的であったが、次第に普通教育と融合するようになった。とくに中学校や女学校に顕著であるが、高等専門学校でも、仏教精神によるが宗派から独立する哲学館(後の東洋大学)のような学校も現れた。

函館の六和女学校は現地の仏教各派の住職がたてたものである。それは曹洞宗、浄土宗、日蓮宗、天台宗、東西両本願寺の別院等6宗派である。そしてそこに赴任してきた若い女性校長は横浜のミッションスクール・フェリス和英女学校の卒業生であった(『函館大谷学園創立七十七年記念学園誌』)。

このように学校設置について仏教各派は融通無碍<sup>むげ</sup>であった。語彙<sup>い</sup>の豊富な僧侶は分校・支校などの固い言葉は用いたくなかったろう。

組織的にかなり広範囲に中学をたてた真宗大谷派は京都中学、尾張中学とっているし、真宗本願寺は第二中学、第三中学、浄土宗は第五教校、

第八教校等、ナンバーを打っている。曹洞宗は大学林専門学校(後・駒沢大学)の名称を用いたことがあるが、分校、支校はごく一時的で、定着した名称にはならなかった。(完)

## [個人研究]

### 健康法・冷水養生法の提唱

谷本宗生

明治21年4月20日、帝国大学医科大学教授の佐々木政吉が第一高等中学校講義室で、「冷水養生法」の演説を行っている。なぜ、このような演説を第一高等中学校で行ったのか。官報には、「此法ヲ行ヘハ精神及身体ノ健康上ニ大ナル益アルヲ信シ教頭村岡範為馳君ニ其言ヲ開陳セシニ同君モ欧州留学中已ニ其有効ノ法タルコトヲ実験セラレタルヲ以テ直ニ之ヲ可納シ其旨ヲ校長ニ具申セラレタリ幸ニ校長閣下ノ聴ク所トナリ余ニ囑シテ本日冷水養生法ト題セル一篇ヲ演説スルノ光榮ヲ得セシメラル…先ツ年少ニシテ身神ノ發育ヲ非常ニ要スル人殊ニ学士トナリテ将来国家ノ大任ヲ負フヘキ高等中学校学生諸君ヨリ始ムルヲ以テ適当トス是レ余カ村岡君ニ鄙見ヲ陳述セシ所以ニシテ」(同年5月3日)と、その事情経緯が示されている。演説者の佐々木によれば、「其用法最モ単簡ニシテ別ニ費用ヲ要セス」「簡便ノ法ニシテ身体ヲ強壮ナラシメ精神力ヲ爽快活発ナラシムルノ大効ア」る冷水養生法は、自分ばかりではなく教諭の松山誠二や小原頼之なども衛生生理(博物)の講義にて生徒らに講授しているとする。たしかに、『第一高等中学校一

覧』(明治21年)をみると、松山も小原も博物を担当するものとし、予科第三級で第一～三期(毎週2時間ごと)にわたって、「衛生及生理ノ大意」を講義している。その講義のなかで、健康法の1つとして冷水養生法が取り上げられていたのであろう。

実は、佐々木の第一高等中学校での演説内容を、石川県第二部衛生課が明治21年6月2日に、『冷水養生法』として取り纏め出版している。なぜ石川県の行政当局がそのような措置を行ったのであろうか。県知事の岩村高俊は、明治19年5月に「学校衛生」の要項を達し、そのなかで「日々水拭或ハ水浴ヲナサシム」と健康法を提唱していたが、なかなかそれを継続的に実践する学校が少なく苦慮していたという。そのような折り、佐々木の演説・冷水養生法の件をみつけ、明治21年6月直ちに尋常師範学校を手始めにして県内諸学校に「別冊」配布して実践を周知徹底するようにもとめたとされる。「学校ハ他ノ教科ヲ欠テ水拭水浴ノ清潔健康方ヲ課スル固ヨリ緊急適切ノ授業タリ之ヲ行フ只教師ノ注意ト熱心ニアリ本県教育ノ局面ニ当ル者自他ノ為メ努力セサルヘ

カラス別冊ヲ附シ特ニ諭達ス」(明治21年6月15日、石川県諭示第三号)。そのいっぽう、第一高等中学校での佐々木の演説は、残念ながら第一高等中学校の生徒らの多くには芳しくなかったようである。「多数の生徒は声を揚げて教授の呷弁を嗤笑せり。是は実に心ある人をして嘔吐をも催さしむべき非礼の振舞」(夏目漱石「中学改良策」明治25年12月)であったという。

第一高等中学校以前の大学予備門でも、生理及健全(生物学)が松山誠二らによって講義されている。洋書テキストを用いながらも邦語でもって講義を行い、人工体骨格や解剖掛図などを参考に

しながら説明を加え、健全学(空気、飲水、食物、衣服、運動・精神に関する健全法)については「日常ノ喩例ヲ引テ弁釈シ生徒ヲシテ人身生活ノ妙理及之ヲ保護スルノ健康法ヲ瞭然認識セシムルヲ期ス」(『東京大学予備門一覽』明治16年)の内容であったとされる。松山の講義は、おそらくはテキストの字面をなぞる講義ではなく、実例を必要に応じて挙げるなど、できる限り生徒に分かりやすい授業を試みたのではないかと想像される。大学予備門や第一高等中学校の生徒らによる評判は、きっとよかったのであろうか。

## [個人研究]

### 京都府下大村達齋の医学校の名称について

田中智子

1880年代のはじめ頃、京都には府の医学校のほかに、それなりの規模をもった民間の医学校が二ヶ所あった(拙著『近代日本高等教育体制の黎明』第4章参照)。ひとつは菅野慎齋という静岡県出身の士族が設立した汎愛医学校であるが、詳細はあまり明らかでない。もうひとつが、津山藩出身の大村達齋が経営する医学校であり、これが新島襄とも深い関わりをもっていく。

この大村達齋の医学校の名称を、筆者はずっと「洞酌」医学校だと思い込んでおり、前掲著書をはじめ様々な場でそう記してきた。ところが先日、京都府立総合資料館の資料主任(京都資料担当)松田万智子さんから、「洞酌」ではなく「洞酌(けいしゃく)」医学校であるのご教示いただいた。

かつて『総合資料館だより』No.123・124(2000年4・7月)に掲載された松田さんの「幕末明治

維新の外国語辞書(館蔵資料紹介)」によれば、「洞酌」とは中国の詩経から採られたことばで、「祭祀に供するため、定められた聖地の神水を遠くまで汲みにいくこと、またはその水」を意味し、達齋が養子に入った先の大村家先代医師、達吉の号が「洞酌楼」であったらしい。

このようないわれのある校名を、なぜ筆者は「洞酌」などと間違えてしまったのか。それは、『同志社百年史』(1979年)『京都の医学史』(1980年)といった基礎的概説書が、こぞって「洞酌」と書いていたからにはほかならない。同志社社史資料センターの「新島遺品庫」HP上では、初期同志社関係原文書を画像で閲覧できる。あらためてこちらを確認したところ、「洞酌」と見間違えてもおかしくはないものの、たしかに「洞酌」と読める文字を何か所も確認できた。しかし、「新島

遺品庫」資料目録上のタイトルそのものが「洞酌」と誤記しているがゆえに、鼻から「洞酌」と思い込んで史料を眺めてしまったのである。——といった経緯で、「洞酌」と誤記した（今なお誤認している）研究者は、私以外にも複数存在するはずである。

同時代人であるならば決して間違いはしなかったであろう「洞酌」が、どうして「洞酌」として市民権をもつに至ってしまったのか。その発端は、『同志社百年史』『京都の医学史』よりもずっと前に遡り、今のところ、戦時下に刊行された『京都府教育史』上（1940年、皇紀2600年・京都府教育会60周年記念）が大本ではないかと推察している。この編纂に必要な史料を集めたのは、国史学者徳重浅吉である。京都府行政文書群から彼が抜き書きした膨大な教育関係記事、すなわち「徳重文書」は、教育史研究上、貴重な遺産であるが、その中の大村達斎に関わる筆写箇所が、すでに「洞酌」になってしまっている。したがって、これを利用した『京都府教育史』の記述も「洞酌」となってしまった。ここから『同志社百年史』『京都の医学史』へと伝染した可能性が大いにある。

とはいえ、自分の過ちを、徳重博士や『京都府教育史』のせいにはすることはできない。なぜなら、何度か目を通したはずの『文部省第十年報』（明治15年）の私立専門学校欄には、きちんと「洞酌校」としてリストアップされているからだ。思い込みというものは恐ろしい。

以上、「ただでは間違えない」という根性から、誤記＝「洞酌」のルーツを探ってみた。もしかすると、「徳重文書」よりもっと早くから誤記は現れるのかもしれない。その探究を継続課題としつつ、今後、正しい表記＝「洞酌」の普及に努める所存である。とりあえず、同志社の「新島遺品庫」オンライン目録を、「洞酌」に直してもらえないか頼んでみることにしよう。

教訓は、①先入観を排し、虚心坦懐、文字そのものに向き合わなくてはならない。②（一朝一夕に身に付くものでもないが）幅広い教養が必要である、の2点である。なお恥ずかしながら、筆者は「洞酌」を、どこかの学区だろうと勝手に想像していた。京都の全学区名ぐらい頭に入れておけ、という話でもある。

## [例会]

### 例会の概要（2013年2月20日）

谷本 宗生

2013年2月20日（水）、晴れ空ながら風がまだ冷たいなか、午前10時過ぎ高円寺・神辺邸に会員諸氏（神辺、荒井、富岡、田中、佐喜本、谷本）が例会に集った。三木会員は午後1時過ぎに例会に合流し、荒井会員は午前の部が終了して退出された。富岡事務局のもと、記録作成：谷本、

例会進行及びレジュメ発送：田中、といった役割分担がなされた。

まず代表の荒井会員より、4年間の科研費助成の終了を受けて提出することになる成果報告書（2014年3月）について、主な構成柱立て試案が提示された。一例として（1）1870年代から80

年代へ (2) 80年代における高等普通教育と専門教育の再編 (3) 高等中学校の構想 (4) 高等中学校設置 (5) 高等中学校の教育内容・生活、といった項目に、会員諸氏がいままで調査研究で取り組んできた論考(年報の4号分など)を荒井会員が当てはめてみた説明となった。議論を経たなかで、従前の研究年報などの掲載原稿をできる限り成果報告書では活かすことが皆で確認された。

2013年10月を採録原稿の目処とし、その取り纏め役を荒井・小宮山会員で行うこと、成果報告書(A4版縦書き)は科研費予算で刊行する(ただし、発送代は別とする)ことが合意された。

また、研究年報5号(2013年10月刊行)は本年度の科研費予算で当初の予定とおり、秋の教育史学会開催に間に合わせるかたちで刊行すること、投稿原稿の締め切りは8月15日とし、取り纏め役は富岡・田中会員で行うこと、多くの会員原稿が投稿されることが望ましいが、神辺・荒井・富岡・三木による執筆原稿は本人の要望もあり掲載予定であることなどがあらためて確認された。次に、2014年10月ころ予定される刊行助成申請の件(刊行助成申請本の基本的な考えかた、構成試案、執筆分担予定者など)は、次回6月に開催予定の例会において、年報5号の投稿論文題目と合せて、各会員から自身の執筆試案(執筆希望の確認)を報告することとした。それを踏まえて議論し、刊行助成申請(原稿執筆締め切りは2014年8月ころ)の件は決定したいとした。

事務局の富岡会員から、科研費最終年度の交付金(90万円)の配分についてどのようにしたらよいかと提起があり、議論した結果、科研費成果報告書代(42万円)と年報5号代(14万円)の

印刷代計56万円、佐喜本会員交付分9万円、三木会員交付分9万円、小宮山会員交付分8万円、田中会員交付分4万円、富岡会員交付分4万円の高円寺例会の参加交通費計34万円という配分方が確認された。ちょうど予定した午前中の議題もおおむね片付き、正午を過ぎたところで馴染みの出前寿司(ちらし寿司)が神辺邸に届けられたので、午前の部を終え昼食を皆でとることとした。

昼食後の12時45分、田中会員の進行のもと午後の部が開始された。まず佐喜本会員から、2012年度の科研費執行状況及び調査内容が簡潔に示された。年報4号に投稿後、カリキュラム班の調査(数学等の教科書調査)を継続する旨が説明された。神辺会員から、自身の尋常中学校のカリキュラム分析と合せて、高等中学校のカリキュラム、用いた教科書などについてはこの機会にぜひ明確にしてほしいと要請があった。谷本会員から、高等中学校でも用いた一高(駒場)、三高(京都)、四高(金沢)の教育掛図については、すでにデータベース化され公開されているので、これをカリキュラム分析に活用してみても面白いのではないかと提案もあった。佐喜本会員は、カリキュラム分析と並行するかたちで、個人研究としては第五高等学校の調査研究を再開したいとも語った。年報4号掲載の熊本・九州学院の事例とこの研究がうまく繋がれば、熊本・九州地域の中等・高等教育の展開過程が解明されるであろう。

三木会員より、鹿島英語学校・鎔造館調査報告がなされた。福岡の博物館が所蔵する鹿島英語学校・鎔造館の学校日誌、入退学書類、卒業履歴書、金銭出納簿、設立運営書類などは貴重な一次史料群で、興味深い事柄も数多く見出せるであろうと

説明した。たとえば、

鹿島英語学校日誌（明治22年4月1日付）には、「第五高等中学校教諭中原淳蔵学事視察トシテ来校」とあり、第五高等中学校との関係性をうかがわせる点である。また鎔造館日録（明治25年4月25日付）では、「会議ヲ開キ同窓会ナルモノヲ起シ爾後毎月第一土曜日午後第一時ヨリ討論演説会ヲ開クコトニ決定セリ」とあり、どうしてこの際に同窓会を組織活動しなければならなかったのかという興味深い疑問が生じ、同上日録（明治25年7月2日付）でも「本館ハ向後専ラ旧藩主公ニ□テ維持方御担任有之候事 旧藩主公ノ御委嘱ニ依リ田中馨治氏校長ノ職務ヲ執ララル事 数学本教師ノ出来候迄仮リ数学教授者ヲ雇入ルル事」とあり、旧藩主との密接な関係性を裏付ける点である。神辺会員や田中会員からも、このような興味深い一次史料群をいかに三木研究の独自性（鹿島英語学校・鎔造館モデル）として明確に位置付け、活用するのかを大いに期待したいとした。説得力ある分析がもとめられるといえるだろう。

谷本会員から話題提供として、哲学者・帝国大学文学博士の井上哲次郎（1855～1944年）の健康法・勉強法が示された。井上は69歳で東京帝大退職後も、学習院や哲学館、大東文化学院でつとめるなどし、冷水浴、歩行散歩、屈伸法などの健康法を継続的に行い、独自の勉強法も開発して自身の著書や演説などで青年学生らに力説した。健康・衛生学にもかかわる体育の導入普及については、体育史研究者・大久保英哲さん（金沢大）の研究が参考になるであろう。井上哲次郎「青年学生勉強法」『人格と修養』（1915年）の一節に

は、勉強室の適切な温度（15～18℃）、頭をクリアにする秘訣（早起き後の冷水浴）、四季のうちでいちばん勉強に適した季節（秋冬のころ）、食事の際の注意（満腹は禁物、食事時間の習慣化、読書しながらの食事も禁物）といった興味深い事柄が示されているとした。また、帝国大学文科大学生であった正岡子規らも井上の哲学講義を受けており、子規が帝大を退学するに至った理由の一端に井上の退屈な？講義ぶりを挙げているという。富岡会員から、井上も注視していた明治期の千里眼研究について、木下広次とのかかわりも深い模様と示唆があった。好奇心旺盛な井上や木下の如く、当時の帝大知識人らの幅広い人間関係、帝大・教育界を騒がす事件などは、本研究会とは別の機会にぜひ紹介したいとした。

田中会員から、2012年度の研究活動及び今後の研究動向について簡潔明瞭な報告がなされた。京都看病婦学校の開設運動（『キリスト教社会問題研究』2013年1月）、京都府の実業教育構想（『研究年報』2012年10月）を事例として、京都・地域の専門教育、実業教育の様相を解明する研究を行ったとした。また、地方都市（第二・第四・第五区）と高等中学校制度の解明に取り組み、森文政期の『倫理書』編纂事業について再検討を試みたとした。とくにフロアの一人として興味深いと感じられた点は、森文政への田中の評価・コメントである。『倫理書』編纂を例に、「同時代人の回想を筆頭に、森一人に即した後世の諸研究の視角は妥当ではない。」とし、これは従前の大学史研究で側近の木場貞長の回顧談によって、「帝国大学令」が森有礼一人で容易に作成されたとみた点と等しいものと思われる。田中が「一種の大同団

結的状況、多くの人間のエネルギーを喚起し集結させ、文政への意見反映を許容する態勢を提供した」とみる評価は、森の「自理自働」という考えかたと相応に共通するのではないかと感じられた(『森文政期の大学政策』谷本修論、1992年)。ただ「意見反映」の余地が、どの程度文政・政策上で実質的に許されていたのかは、慎重に検討すべき問題であろうと思われる。今後の研究展望として、田中会員は高等中学校の「社会」史と捉え、第一～五区内の各府県が高等中学校をどのように受けとめたのかなどを明らかにして整理したいとした。また高等中学校のカリキュラム分析についても、次回6月の例会において田中の執筆試案を示してみたいとした。2012年12月に岡山大学地域総合研究センター主催の学都研究プロジェクトで、学都研究・3都市シンポジウム(パネラー:金沢大学、熊本大学、岡山大学)が開催されており、このような動きなども田中・谷本会員らには参考になるのであろう。

神辺会員からも、研究年報5号へ向けての執筆構想が示された。詳細内容については、次回6月の例会で追って報告するとした。高等中学校研究については、高等中学校の設置(ハード面)と高等中学校の内容・教則(ソフト面)をまず明らかにしなければならないと強調された。加えて、高等中学校などの教育機関の校舎・間取りなどについても従前あまり明らかにされていないのではないかとし、その実態解明を社会文化史的にできる限りさまざまな資料を用いて今後試みたいとした。建築史学の研究蓄積、たとえば宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』(1989年、九州大学出版会)は参考文献となるだろう。また角田

真弓(東京大学工学部技術専門職員)の科研費研究「高等教育からみる近代建築学の成立に関する史的研究」(2008～2011年)は、狭義の建築史学にとどまらず、工部大学校や第一高等中学校・帝国大学などの建築設計関係資料の所在調査も積極的に行いその目録化につとめており、学際的な思考がみられ有効と思われる。木方十根『「大学町」出現 近代都市計画の錬金術』(2010年、河出書房新社)も好著で注目される。

富岡会員から話題提供として、水村暁人さん(麻布中学・高校)の『麻布中学校々友会雑誌』を高校生らと読む、総合学習の取り組み事例が紹介された。麻布の校友会雑誌は、1899～1945年まで刊行されていた雑誌で、学園史編纂・教育史研究上からも貴重な資料と思われる。生徒らの読み合わせを踏まえていくうえで、将来的には目録作成やデータベース化まで構想しているという。水村が「生徒のほとんどは、(今のところ)将来的に歴史を専門的に学ぼうとは考えていない。しかしこの講座を通じて獲得した共同研究の方法論は、彼らがどの分野に進もうとも汎用性の高いものである。」というとおり、人間形成学を目指す教育学そのものの精神、目標とも通じるものと思われる。加えて富岡会員は、木下広次の「在仏雑記」と木下助之宛て書簡を近く近畿大の紀要で史料紹介する旨、皆に説明された。関連する先行研究として、三浦信孝『近代日本と仏蘭西 10人のフランス体験』(2004年)や福田秀一『文文学者の留学日記』(2007年)、泉三郎『青年・渋沢栄一の欧州体験』(2011年)などは参考になるものと思われる。また、もっか継続的に進めている高等中学校のカリキュラム分析については、ニ

ューズレターや年報などを介して調査報告を随時行っていきたいとした。

鄭会員から（富岡会員の代読）、2012年度の調査報告が簡潔になされた。(1) 文部官僚経験者の著述収集 (2) 高等中学校の教職員陣容と資料把握 (3) 学校と文部省との関係・文部行政、といった主な項目に沿って、もっか地道に調査活動を行っているとした。本年4月以降は1年間韓国に滞在予定ながら、たとえば高等中学校教職員スタッフ（1886～1894年）の勤務一覧を作成するなど、当時の文部行政の実態に肉迫しようとする鄭会員の野心的な意欲が感じられた。荒井・田中会員らがしばしば強調される「森文政」とは、文部行政を継続的に検討している鄭会員からみると、いったいどのように位置付けられ評価されるのであろうか。服部一三や松井直吉については、鄭会員は相応の調査研究を進めていると聞くが、辻新次や久保田譲ら文部官僚の調査研究についてもどのような見通し・展望なのか、うかがってみ

たいところである。また、高等中学校教職員スタッフの履歴調査とも関連すると思われるが、そもそも各担当教員がどうしてその学校に勤務しているのか、素朴ながらこの疑問がクリアになれば、実際の教育風景（たとえば、博物学担当教員がどのように授業を行っていたのか）も想像しにくいだらう。

17時近くになり、2月の例会は予定された進行完了をもって閉会した。遠方からの参加会員は都合に応じてそれぞれ退出したが、神辺・田中・谷本会員は19時近くまで、理想とされる共同研究の在り方をめぐってとりとめもなく話し合いを続けた。そして、次回予定される6月の例会において、今後の本研究会活動の方向性はより具体化されるであろうと確認された。なお、次号ニューズレター（41号）の執筆締め切りは2013年3月末であるが、2月例会終了を受けて多くの会員による積極的な投稿を期待したい。

[お知らせ]

次回の例会は、6月に開く予定です。あらためて日程調整いたします。『年報』第5号の執筆報告が主な内容となります。掲載予定の方は例会で報告する旨、前回の例会で確認されておりますので、よろしくお願ひします。

次号ニューズレター（第42号）の原稿締め切りは、2013年6月31日です。

「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第41号 2013年4月15日発行

<研究会連絡先・原稿送付先> 富岡 勝 「1880年代教育史研究会」事務局  
〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学教職教育部 富岡勝研究室 気付

E-mail: [tomiokamasa@kindai.ac.jp](mailto:tomiokamasa@kindai.ac.jp)

<HP> <http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/>